



高原の風だより

2026（令和8）年1月発行 <第32号>

今年は午（うま）年

木曽馬のようにやさしくたくましく

新年明けましておめでとうございます。皆さまにとって希望に満ちた一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

さて、木曽町は合併から21年目を迎え、大きな節目の年となりました。町長をはじめとする理事者が交代し、議会も半数が新人議員となりました。また、4月には中学校が統合され1校となります。

人口減少など課題は山積していますが、木曽馬のようにやさしく、そしてたくましく、持続可能なまちづくりに挑戦してまいります。



元旦マラソンに参加した6頭の木曽馬たち

元旦マラソンで好スタート! 令和8年午（うま）年の元旦は、雪もなく穏やかな天気



号砲の合図で一斉にスタートする参加者

に恵まれ、雄大な御嶽山も姿を見せる絶好のスポーツ日和となりました。開田高原では3地区それぞれで恒例の元旦マラソンが行われました。このうち末川地区では木曽馬の里を会場に開催され、今年は午年ということもあり、乗馬センターの木曽馬6頭も参加して大会を盛り上げました。

園児から高齢者まで約50人の参加者は、はじめに熊野神社の禰宜さんによるお祓いを受け、準備体操と記念写真の後、馬と一緒に思い思いのペースで走り、心地よい汗を流しました。走り終えた後は分館で表彰式と祝賀会が行われ、賞状や参加賞を手にした子どもたちの笑顔が会場いっぱいに広がっていました。

人間万事塞翁が馬（じんかんばんじさいおうがうま）

「馬の耳に念仏」「馬耳東風」など、馬に関する故事や諺は数多くありますが、私が最も好きなのは中国の故事成語「人間万事塞翁が馬」です。一見、不幸に思える出来事が幸運に転じ、また幸運に見えることが不幸につながることもある。だからこそ、一つ一つの出来事に一喜一憂するのではなく、長い目で物事を見ることが大切だと教えられます。これから先、どのような出来事に遭遇するか分かりませんが、前向きに受け止め、木曽馬のように強くたくましく歩んでいきたいと思えます。そして、あの木曽馬の瞳が持つやさしさを決して忘れないよう心がけていきたいものです。

「人間万事塞翁が馬」昔、中国の北の国境近くに、塞翁（さいおう）と呼ばれる老人が住んでいました。ある日、塞翁の飼っていた馬が逃げてしまいました。近所の人たちは気の毒に思って慰めましたが、塞翁はこう言いました。「これが不幸とは限らない」しばらくすると、逃げた馬が立派な馬を連れて戻ってきました。人々が祝福すると、塞翁はまた言いました。「これが幸運とは限らない」その後、塞翁の息子がその馬から落ちて足を骨折してしまいます。人々が同情すると、塞翁は言いました。「これが不幸とは限らない」やがて戦争が起こり、若者たちは徴兵されましたが、足をけがしていた息子は兵役を免れ、命を落とさずに済みました。

本州で唯一の在来馬

木曾馬の保存と活用を考える

木曾馬保存の現状と課題

木曾馬は、私たちの地域に受け継がれてきた貴重な文化的財産であり、今その存続が大きな岐路に立たされています。木曾馬は、北海道和種馬（どさんこ）や宮崎県都井岬の御崎馬、沖縄県宮古島の宮古馬と並ぶ日本の在来馬です。これらの馬は、近代的な外国馬が導入される以前から日本各地で人々の暮らしを支えてきました。現在、在来馬は8品種が国や自治体によって保護されていますが、いずれも多くの課題を抱えています。

本州で唯一の在来馬である木曾馬は、全国で約140頭しかおらず、そのうち約40頭が木曾町開田高原で飼育されて



います。頭数が極めて少ないため、近親交配により障がい馬の誕生という、品種存続に関するリスクを抱えています。さらに、飼料代の高騰など飼育にかかる経費も年々増えています。今後、町の財政状況が厳しさを増す中で、木曾馬を将来にわたって守り続ける体制をどう維持していくかが、大きな課題となっています。

御嶽山を望む放牧場で草を食む乗馬センターの木曾馬たち

観光とのさらなる連携必要

～木曾馬の価値生かし「稼ぐ力」を～

町の人口が減少し、財政が厳しくなっていく中で木曾馬の保存と活用を持続可能なものにしていくためには、経費の削減に努めるとともに、安定した財源の確保が欠かせません。現在、乗馬センターでは乗馬体験や馬車乗車体験をはじめとした事業を通じて、収入を生み出す工夫を重ねています。また、町内外で開催される祭りやイベントに参加するなど、木曾馬の魅力を発信しながら収益につながる取り組みも行っています。しかし、こうした努力だけでは増加する維持費を十分に賄うまでには至っていないのが現状です。今後は、観光とのさらなる連携を図りながら、木曾馬の価値を生かした「稼ぐ力」を高めていくことが求められています。

木曾馬の里再整備 ～しっかり議論を～

昭和57年に長野県天然記念物に指定された木曾馬は、木曾町にとって貴重な地域資源です。町では木曾馬を保存しながら観光面でも活用し、地域の活性化につなげることを目的に、令和5年度から10年間の「木曾馬の里再整備計画」を策定しました。この計画では、既存施設の改修や



乗馬を楽しむ子ども（上）馬車に乗る観光客（下）新設などを進めることで、将来的に木曾馬の飼育頭数を町内で75頭、郡内で100頭とすることを目指しています。整備にあたっては、現場や地元住民、議会、保存会関係者などがしっかりと議論を重ね、無駄な資金投入とならないよう取り組んでいくことが求められます。議会としても担当課や支所から説明を受けるだけでなく、直接乗馬センターを訪れて現場の声に耳を傾けるなど、しっかり議論を重ねながら計画を進めていかなければならないと考えています。

木曾馬と田起こしや運動会 ～開田小で盛んな交流～



馬に乗って入場行進 昔の衣装を身に着けた児童

会長が馬に乗り、チームを先導します。アトラクションでは、6年生がかけっこで木曾馬と競走し、観客から大きな声援を受けます。10メートル以上のハンディがあっても、木曾馬はあっという間に児童を追い越して駆け抜けていきます。

なお、この様子は昨年11月にテレビ朝日系列のバラエティ番組「ナニコレ珍百景」でも紹介されました。

開田小学校（児童数37人）は、近くにある木曾馬の里（乗馬センター）とのつながりを生かし、以前から木曾馬との交流が盛んに行われています。児童たちは、乗馬センターを訪れて木曾馬と触れ合うだけでなく、毎年春には、木曾馬が引くすきを使って田んぼを耕す「馬耕」を体験しています。すきの柄を押さえながら馬の後ろかについて歩く中で、その力強い馬力に毎年驚かされています。耕した田んぼでは、田植えや稲刈りも学校行事として行われています。

また、秋の運動会にも木曾馬が登場します。入場行進では



かけっこで木曾馬と競走

馬頭観音像の慈悲深い眼差し ～絵馬堂には馬の像も～

かつて開田高原では、木曾馬が盛んに飼育されていました。毎年卯月8日の縁日には馬の健康を祈願して丸山観音に参拝する人々で、恩木集落は大変な賑わいを見せたといえます。

現在では訪れる人もほとんどなくなりましたが、苔むした石段を上った先には観音堂があり、今もなお馬頭観世音菩薩像が慈悲深く穏やかな眼差しを向けてくれます。途中の絵馬堂には、鉄で作られた等身大の馬の像が安置されており当時の信仰の深さを今に伝えています。馬頭観世音菩薩像



馬頭観世音菩薩像



絵馬堂にある鉄製の馬

また、南に目をやると末川集落や雄大な御嶽山を一望できる、知る人ぞ知る絶景スポットです。

最後の純血種「第三春山号」 ～開田郷土館ではく製展示～



学術的価値が高い「第三春山号」のはく製

開田郷土館は、木曾馬に関する史料をはじめ、麻衣や生活民具など開田高原の歴史と民俗を今に伝える資料を展示しています。中でも特に注目されるのが木曾馬最後の純血種といわれている「第三春山号」のはく製です。春山号は昭和26（1951）年生まれの牡馬で、純血の木曾馬としての遺伝的特徴をよく残しており、学術的にも極めて高い価値を持っていました。その貴重な特徴を後世に伝えるため昭和50（1975）年、苦渋の決断のもと安楽死という方法が選ばれました。飼い主の柘植清一さんをはじめ地域の人々は断腸の思いで春山号との別れを迎えたのです。

「開田郷土館」のご案内

場 所：〒397-0301 木曾町開田高原末川 1899-4

開館時間：午前9時～午後4時30分

休館日：火曜日、年末年始

入館料：大人200円 小・中学生150円（町民無料）

*障がい者手帳お持ちの方及び付き添い者1名無料

電 話：24-0870 指定管理者（おんたけウェルネスラボ）



町民登場

ごみ はなえ
五味 英絵さん (37歳・木曾町開田高原) ㊄



五味英絵さん

木曾馬はおとなしくて乗りやすい

「サラブレッドと比べると木曾馬はおとなしく、背中が丸いので揺れが少なく乗りやすいです」と語る五味さん。地域おこし協力隊として木曾馬乗馬センターで働き始めて3年目になる。同センターでインストラクターを務める五味さんは乗馬体験では、馬の手綱を引き、利用者を安全に導く役割を担っている。仕事は、乗馬体験のほかに馬の世話

や馬房の掃除、放牧場の整備など幅広く、馬が好きでなければできない仕事だ。連日厳しい寒さが続く中でも「動いていればあまり寒さは感じませんが、放牧場の水桶が凍ってしまうのが大変です」と五味さん。

五味さんは香川県高松市の出身。父親の実家の近くで牛を飼っている家があり、小さいころから大きな動物が好きだった。小学校の時には初めて馬に乗ったが、あの時の印象が強く心に残っている。

地元高校を卒業後は、歴史に興味があったことと、雪の降る所に住んでみたかったことから島根大学に進学。法文学部で東洋史などを学びながら4年間、馬術部で活動した。3年生の時に中国・四国学生馬術大会の障害の部(60センチ)で6位入賞したことが懐かしい思い出だ。



木曾馬と五味さん

大学卒業後は三重や奈良の乗馬クラブでインストラクターとして働いていたが、繁殖や馬耕などに興味があり

「乗馬とは違った分野で馬と関わりを持ちたかった」とクラブを退職し、木曾町へ来ることになった。五味さんは現在、町営住宅に住んでいるが、ずっと古民家を探し続けている。かつて木曾馬と人が同じ屋根の下で暮らしていたという古民家に魅力を感じているからだ。「古民家を早く見つけて、まずは犬を飼いたいですね。そして、将来的には馬も飼えたら・・・」と五味さんの夢は膨らむ。



元旦マラソンに参加

私の本棚 『すんきへの道』(寺本かんな著、同人誌印刷通販ペンタロー)

木曾町開田高原出身の寺本かんなさん(作家名・てらかん)が自費出版した木曾の伝統食「すんき」をテーマにした絵本。冬の伝統食として親しまれてきた「すんき」について、赤かぶの収穫から洗い方、切り方、茹で方、発酵の工程、食べ方までを独特で温かみのあるイラストで丁寧に紹介している。写真ではなくイラストで描かれているため、初めての人にも親しみやすく、作り方の流れが直感的に理解できるのが特徴だ。塩を使わず乳酸菌で発酵させる「すんき」の魅力や製法を知りたい人、実際に作ってみたい人におすすめの一冊になっている。価格は税込みで1冊700円。かんなさんの両親が営むペンション上天気や開田高原観光案内所などで販売している。



編集後記

新しい年を迎えて、早くも一か月が過ぎようとしています。改めて歳月の流れの早さを感じずにはいられません。国内外では林野火災などの災害が多発しています。令和8年午(うま)年が町民の皆さまにとりまして、無火災・無災害の実り多い素晴らしい年になりますことを願っています。



編集・発行者：大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 木曾郡木曾町開田高原末川5190番地

電話& FAX 0264-42-3661

携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com



Facebook